

恵美「みんなはプロ  
デューサーのことどれ  
くらい好きなの？」

りおんP

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

地方イベントに出演するため、前日から現地に集まった春香・恵美・茜・このみ・星梨花・瑞希。観光の後、ファミレスでのんびりしている6人だったが、さりげなく言い放った恵美の一言が6人に嵐を起こす！ ……かも知れない。

第1話

# 目次

1



## 第1話

秋の足音も近づく頃。地方のライブイベントにお呼ばれした私たち765プロは、6人のアイドル……このみさん、恵美ちゃん、瑞希ちゃん、茜ちゃん、星梨花ちゃん、そして私こと天海春香、このメンバーでやってきました。

プロデューサーさんのはからいもあって、6人全員で前日の朝から来るのが出来たので、今日は一日観光三昧！ 徐々に日が沈み始めた午後5時、ホテルに戻る前にちよつと休憩しながらお話しよう、と恵美ちゃんの提案により、今はホテル近くのファミリーストランでのんびり。本当に恵美ちゃんはファミレスが好きだね。

「いやーこのドリンクバーは素晴らしいねえ！ お茶もジュースも色んな種類があつて、どれを混ぜようか悩んじゃうなー！ ……で、このみはなんで店に入ったときからずっと落ち込んでるワケ？」

席に着くなりテーブルに突つ伏したままのこのみさんである。

「……だって、こんなアダルトイなお姉さんがいたら、一応『お煙草は吸われますか？』って聞くでしょ!？」

ゆつくりと顔を上げて、お怒りと悲しみを混ぜた表情で語るこのみさん。でも、確か

このお店は。

「えーと、このみん？　ここ全席禁煙だよ？」

「え、そうなの？　……なーんだそうだったの！　そりやあ聞かれないわよね！　このみお姉さんのアダルテイな魅力に気付かなかったわけではないのね！　よかった！」

茜ちゃんが代弁してくれた。それを聞いて表情に明るさが戻る。良かった良かった。

「多分たばこが吸えるお店でも聞かれないって思いますけど……」

「……箱崎さん、それは言っちゃダメです」

両隣の会話は聞かなかったことにしよう。うん。

「そっかいえばさー」

恵美ちゃんが、ふと思いついたというような感じで。

「みんなはプロデューサーのことどれくらい好きなの？」

唐突に爆弾を投げ込んだ。茜ちゃんはちようど次のひとくちを掬おうとしていたプリンに盛大にスプーンを突き刺し、このみさんはドリアを口にしたタイミングだったのだけほけほと咳き込み、瑞希ちゃんも良く見ると目が泳いでいる。かくいう私もガムシロップを入れたアイステイーをかき混ぜる手を止めてしまいました。ただ一人、星梨花ちゃんだけがここにこに笑顔で私と同じアイステイーを飲んでいる。

「め、めぐみんいきなり何言い出すのさ!？」

「え？ いや気になってさー。仕事とはいえ一緒に過ごす時間も多いじゃん？ そこんとこみんなどうなのかなーって。どーなのさ茜？」

「ええ!!? あ、茜ちゃんは……そうだなー……そうだなー! ほら茜ちゃんカワイイからなあー! まあ茜ちゃんがつて言うか、プロちゃんが茜ちゃんのこと大好きだから! 茜ちゃんとしてはその気持ちに答えてないと仕方ないよね!!? ね!!?」

「ふむふむにやるほどー。茜はプロデューサーが大好き、と」

「ちよつ!!? そうじゃなくてプロちゃんが……」

「瑞希はー?」

何か言いたそうな茜ちゃんを華麗にスルーして瑞希ちゃんに話を振る恵美ちゃん。もしかしてこれ全員に聞いていくのかな?

「私は………プロデューサーにはすごく感謝していますし、プロデューサーとお話している時は笑顔が多いそうですし。プロデューサーのこと、結構好き、かも。……なんだか顔が熱くなってきました。こういうこと言うの、照れますね。どきどき」

瑞希ちゃんが両手を頬にあててふるふる頭を振っている。瑞希ちゃん、劇場に入った時からすると本当に感情の出し方が豊かになったな。同性の私から見ても、瑞希ちゃんも可愛い。これもプロデューサーさんの力、なのかな。

「ほーう? 瑞希は可愛いなあー、よしよし。このみはどうなのー? お酒呑みに行つ

たりするんでしょ？ お酒呑んだ後に襲われたりしないのー？」

「ぶっ!!!」

ちょうどアイスコーヒーを口にしていたこのみさんが盛大に嘔き出す。

「おおー、マンガみたいなことするねーこのみ」

「誰のせいよっ！ ……ごめんね星梨花ちゃん、茜ちゃん。大丈夫？ コーヒー掛かってない？」

「茜ちゃんの方にはあんまり飛んでないから大丈夫だよー」

「わたしも大丈夫です！」

恵美ちゃんに文句を言いつつも、さつとナプキンをとって隣と向かいの子を気遣いながらテーブルを拭くこのみさん。

「で、このみはどうなのさ？」

「んー、まあ仕事も出来るし、付き合いいいし、酔いつぶれた莉緒ちゃんの介抱も手伝ってくれるし……。好きか嫌いかで言ったら、好きな方かしら？」

「ほほーう、大人の余裕を感じますな、このみん」

「お酒を呑めるようになったら、私も皆さんと行ってみたいです。わくわく」

「私のです！ お酒って、呑んだらどんな気分になるんでしょう？」

「いつか、50人全員お酒が呑めるようになったら楽しそうだね！」



「50人全員で、か。楽しそうね! ……あれ? その時私は一体何歳に……いや、考えない、考えないでおう……!」

何やらこのみさんがぶつぶつと呟きながら考え込んでしまった。このみさんならみんな成人した頃でもきつと今と変わらないですよ、って言おうかと思っただけど止めておこう。

「にやはは……春香はどうなの? ウチらよりもプロデューサーとの付き合いは長いけど」

お、遂に私の番が回ってきちやった。

「長いって言っても、ちよつとただけだね? 私はこの事務所に一番最初に入ったけど、その頃はプロデューサーさんも、社長にスカウトされてプロデューサーになったばかりで、私たち二人とも何をやったらいのか全然わからなくて、とりあえず社長と小鳥さんに言われるがまま走り回って。大変だったけど、楽しくって、それでまあ、それだけ濃密な時間を過ごしてたら、好きとか嫌いって言うより、プロデューサーさんのことは心の底から信頼してる、って感じかな?」

とりあえず思いつくままに言ってみただけだ。……なんで、みんな黙って私を見てるのかな?

「流石765プロの看板アイドル、言う事が違うわね」

「何だかかっこいいです。……ちよつとだけ、妬けちやうぞ」

「流石の茜ちゃんもこれは入り込めないかなー！ 悔しいなー！」

え？ え？ どうしてこうなったの!?

「つまり春香さんはプロデューサーさんの事が大好きなんですね！」

「うんうんそうだねー、星梨花は賢いなー」

「ちよ、ちよつと待ってー!? そうじゃなくって……」

「え？ じゃあ春香はプロデューサー嫌いななの？」

「いやそんなことない！ 私もプロデューサーは好きだよ!？」

「はい春香はプロデューサーが好き、頂きましたー！」

5人みんながぱちぱちと拍手。もー！ いつの間にこんな事にー!?

「めーぐーみちやーん!？」

「あはは、ゴメン、ゴメンってば！ じゃあ星梨花！ 星梨花はどう?」

笑いながら星梨花ちゃんに話を振る恵美ちゃん。ぐぬぬー、最後は恵美ちゃんの番なんだからね！

「私ですか？ 私はプロデューサーさんのこと大好きですよ!」

「「せ、星梨花ちゃん!？」」

満面の笑みで断言する星梨花ちゃん。強い……。

「箱崎さん大胆です。スゴイです。どきどき」

「あらー……若いつていいわね……」

「へ、へー！ そうなんだー！ まあ茜ちゃんもー、まあそのー……」

各自三者三様な反応。ん？ 一番反応しそうな恵美ちゃんが静かだぞう？

「星梨花はプロデューサーのどんなところが好きなの？」

「アイドルについて色々教えてくれますし、頼りになるし、パパと同じくらい大好きですー」

……あ、なるほど、そういうことかー。

「恵美さんはどうですか？ プロデューサーさんのこと好きですか？」

「うんうん、アタシも星梨花と同じようにプロデューサーは好きだよー」

あ、ずるい！

「恵美ちゃん？ 人を散々煽っておいてそれは許されないんじゃないかしらー？」

「めぐみん？ もつと自分に正直になろう？ ほらほらー、プロちゃんのことどう思ってるのかはつきり言えー！」

「所さん。もつとちゃんとお話が聞きたいです。プロデューサーのどんな所が好きなのですか。お話をどうぞ。わくわく」

「恵美ちゃん？ ちょーつとやり過ぎたかな？ ちゃんとお話するまで、みんな恵美

ちやんを逃がさないよー？」

星梨花ちやんを除く4人による包囲網。ふふふ、逃がさないぞー。団結ですよ、団結！

「え、えーっと、そのー、ほらそろそろホテルに戻らないと……？ あ、ほらプロデューサーが迎えに来たよ！ このお話はおしまいっ！」

そんなのにごまかされるほど私たちは甘くない……って、あ、ほんとだ。プロデューサーさんが出入り口できよろきよろきと店内を見回してる。

「さあさあ、お会計してホテル帰るよー」

「何だか煙に撒かれた気がするけれど……ま、仕方ないわね。ほらみんな帰りましょ、忘れ物しないようにね」

このみさんに促されて、みんな席を立つ。茜ちゃんとアイコンタクト。……うん、後でじっくりと、ね？ ふふふ。

「いやー、なかなか良いファミレスだったなー。……え？ 何の話してたのか、って？ みーんな、プロデューサーのことが大好き、って話だよー！ モテモテだねーこのこのー！ ……ま、アタシもだけど。ん、何でもない！ ……信頼してるからね、プロデューサー？」